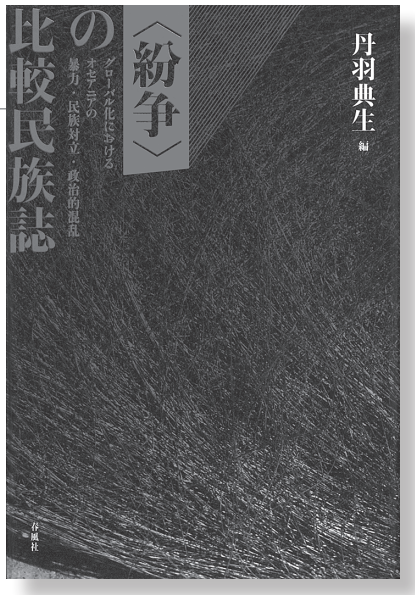

＜紛争＞の比較民族誌

──グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱

丹羽典生編
春風社／ 2016 年／本体　3,700 円＋税

本書は、筆者の科研費による研究（「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学──オセアニア大国の移民を事例に」2013 ～ 2016 年度）と、国立民族学博物館で主催した共同研究（「オセアニアにおける独立期以降の〈紛争〉に関する比較民族誌的研究」2009 ～ 2012 年度）の研究成果の一部として出版したものである。

この共同研究の成果としてはすでに『現代オセアニアの〈紛争〉──脱植民地期以降のフィールドから』（丹羽典生・石森大知編、昭和堂、2013 年）を上梓している。前著が、オセアニアの紛争に関する特に日本語での研究の欠落を考慮して、主要な紛争とその現在の状況に関する基本的な情報の整理に主眼をおいたとすれば、本書は個別の紛争の内実に踏み込んで詳細な専門的分析を行うことを目的としている。

また本書はオセアニア地域という視点から紛争をみ返すことにも主眼がある。冷戦が終了し、いわゆるグローバル化といわれる時代が到来するにつれ、紛争形態に変化が生じたことがしばしば指摘されている。具体的には、国家間の戦争から地域紛争、民族紛争への性質の変化として記述されることが常である。この時代変化について、オセアニア地域の視点から検討を行っている。

本書は、歴史的流れの整理ではなく、〈紛争〉に関する民族誌的な事例研究に比重をおいている。そして、オセアニアの政治的問題を考えるうえで、国家の規模と政治制度に焦点を当てた。オセアニア諸国は、マイクロ・ステートと呼ばれることがあるように、総人口 100 万人以下の国々が集中している地域である。これまでのオセアニアの研究では、政治制度については、その西洋的制度と土着の併存や齟齬という側面が、比較政治学的関心から着目されてきた。本書でも、国家の規模の問題と近代的制度の導入と受容後の現代的動態という論点を注視している。

また時代背景としては、グローバル化とよばれる 1980 年代以降の時代的転換を重視している。国際関係の点では、オーストラリアやニュージーランドといった植民地時代からの旧来の関係に、中国をはじめとするアジア諸国の影響力が増大している地政学的状況を背景としている。そうしたなか、いわゆる民族紛争の形態にどのような変化がみられ、またいまどのように進展しているのかについて検討している。

本書では、以上で整理してきた問題意識と時代背景を念頭において、グローバル化のなかのオセアニアで生起している広い意味での〈紛争〉を考察しているわけである。局所的に発現するミクロな身体的暴力の発現、民族対立、そして政治的混乱という水準から分析することも意図し、いわゆる紛争からはこぼれ落ちてしまうような水準のもめ事を含めて考えていくために、括弧付きの〈紛争〉と表記した。

本書の内容も、それにあわせて構成されており、各章は身体的なレベルで発動する暴力、民族などの中間集団のレベルでの争い、そして国際関係的な水準での軋轢という、規模の変化に準じて配列してある。もちろんどの紛争にも三者の水準の影響が複合的に働いているが、各論者の事例にあったスケールにおいて、オセアニア地域の〈紛争〉の状況について分析されている。

いうまでもなく本書でオセアニアの紛争に関する研究が尽きるわけではない。筆者の関心としては、移民などの国際的なネットワークがもたらす影響のほか、少数民族の紛争時の対応に関する実践が、残された研究課題としてある。主要民族の対立の陰に隠された少数民族が危機的状況におかれたときにどのような対応をとっているのかは、本書で一部の章では取り上げられているが、それを筆者の調査地であるフィジーの文脈でより詳細に検討していきたい。

さらに問題関心から一見ずれているように思われるかもしれないが、紛争の文脈で発現するような民族的アイデンティティが現代の生活のなかではどう発動するかという関心の一環から、「応援の人類学──政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」という共同研究を民博で 2015 年度より開始している。この本の刊行によって得られた成果を、このような形でも発展させていきたいと考えている。

文　丹羽典生

国立民族学博物館研究戦略センター准教授。専門は社会人類学、オセアニア地域研究。著書に『脱伝統としての開発──フィジー・ラミ運動の歴史人類学』（明石書店 2009 年）、編著に『現代オセアニアの〈紛争〉──脱植民地期以降のフィールドから』（昭和堂 2013 年）など。